



「想像」から「創造」へ至る源泉

その昔、多少曖昧だが、「想像」ではなくて「創造」にこそ価値があると、学校の教員にも言われ、世間でも言われていた記憶がある。理科系の大学卒業生がもてはやされ、大学進学生にも人気のあった頃である。そのころは、まだ「想像」の方が足りない、おかしいというような危機感はなかったと記憶している。

開高健の『裸の王様』では、時や場所という背景についての情報がないまま童話を聞かされた児童が、聞かされた童話を自己の経験に照らし合わせて再構築し、童話の本質を紙の上に見事に描き出したが、このように、想像から創造に至る源泉は経験であると思われる。最近、想像が貧困であったり、妄想に変質したり、再構築ができないために事件を起こしたと思われる報道が続いている。要因の一つに経験の不足(特

に幼児期)ないし貧困が考えられる。経験とは、個人の歴史と言ってもよい。幼児期から現在まで、いかに、外界(環境要因のすべて)と接触してきたかということである。その中では、ある時期、一貫した論理性に守られて、快い経験を重ねるといことも必要なかもしれない。

しかし、ここに来て、我々は、経験に値する環境を徐々に失ってきているのではないかと危惧する。あるいは一部バーチャルな環境に置き換わり、変質してきているのではないか。

その結果、「創造」に至る前に、具体概念でも、抽象概念でも、思い描くという想像力に画一化が生じてきていると考えられないか。

時代の進行に伴って、我々の環境も画一化が進んでいるのかもしれない。このようなとき、まずは、個人が自分(と自分の家族)の環境について注意を向けなければならないだろう。自然にも人間にも、外界に触れることを恐れず、積極的に豊かな経験を積まなければならない。

入学センター事務部長 宮崎 寛

編集室

今号のトップ記事、「久野修慈理事長に聞く」は、紙数の都合でインタビューの内容を一部割愛させていただきましたが、ひとつだけ、小欄を借りてご披露したいことがあります。

インタビュアーで久野理事長が紹介された「気骨の判決 東條英機と闘った裁判官」(清水聡著、新潮新書)という著書についてです。

この夏発行された同著は、軍部の暴走が続ぎ、国民の選挙権までが妨害にさらされた中で行われた昭和17年の「翼賛選挙」に対し、戦時中唯一下された「選挙無効」判決を検証。命を懸けてその判決を下した大審院(現最高裁)判事、吉田久(敬称略、以下同)の業績を探究しています。東京法学院(現中央大学)卒後、

法曹入りした吉田は、民法の権威で、判事の傍ら母校で80歳まで教鞭をとり続けました。

著者は、吉田を知る人を丹念に探し訪ねて取材していますが、久野理事長もその一人でした。昭和34年から2年間、吉田の自宅で書生をしてきたからです。

久野理事長に取材した内容が数ページにわたり掲載されている中で、当時、中央大学大学院の院長だった吉田に久野青年が、「正義とは何か」と問うくだりがあります。

そのとき吉田は、こう短く答えています。

「正義とは、倒れているおばあさんがいれば、背負って病院に連れて行ってあげるようなことだ」
けれど、金言です。吉田の人間性を見た思いがしたのです。

(入学企画課 伊藤博)

学生記者が取材・編集する大学広報誌

Hakumon

Chuo
ちゅうおう

2008

秋季特別号

2008年(平成20年)10月23日発行 No.208

発行 中央大学広報委員会

〒192-0393

東京都八王子市東中野742-1

〈編集担当〉

『Hakumonちゅうおう』編集室

☎042-674-2146

印刷 泰成印刷株式会社

〒130-0026

東京都墨田区両国3-1-12

☎03-3631-8141